

## 当院における PRGBS の分離状況

◎沖林 薫<sup>1)</sup>、河内 誠<sup>1)</sup>、飯村 将樹<sup>1)</sup>、延廣 奈々子<sup>1)</sup>、宮澤 翔吾<sup>1)</sup>、水谷 里佳<sup>1)</sup>、及川 加奈<sup>1)</sup>、  
左右田 昌彦<sup>1)</sup>  
JA 愛知厚生連 江南厚生病院<sup>1)</sup>

## 【緒言】

B 群レンサ球菌 (Group B Streptococci ; GBS) は、膣、尿路、呼吸器、消化器に常在する菌で、新生児髄膜炎や敗血症の起炎菌として知られている。また高齢者や糖尿病患者などの易感染性宿主の感染症の起炎菌となり得る。GBS 感染症はペニシリン系抗菌薬が第一選択薬として用いられているが、近年、ペニシリン低感受性 GBS (GBS with reduced penicillin susceptibility ; PRGBS) の存在が報告されている。以前に本学会で、2012 年から 2017 年の 5 年間における当院の PRGBS 分離状況を報告した。今回、2017 年から 2022 年の PRGBS 分離状況を調査し、既報と比較検討したので報告する。

## 【対象と方法】

2017 年 4 月から 2022 年 12 月に当院で分離された GBS 1,781 株を対象とした。薬剤感受性試験はドライプレート (栄研化学) を用い、微量液体希釈法にて測定した。

CLSI M100-ED30 に基づき、PCG の MIC が  $0.25 \mu\text{g/mL}$  以上であった株を PRGBS とした。

## 【結果】

材料別の GBS 分離株数は、膣分泌物 641 株、尿 567 株、呼吸器 255 株、血液 68 株、消化器 47 株、その他 203 株であった。年齢の中央値は 54 歳であった。なお、期間中に GBS 髄膜炎は認められなかった。

GBS 1,781 株のうち、PRGBS は 55 株 (3.1%) であり、既報の 8.2% より大きく低下した。材料別の GBS に占める PRGBS 分離率は、膣分泌物 0.2% (1/641 株)、尿 0.7% (4/567 株)、呼吸器 18.4% (47/255 株)、血液 2.9% (2/68 株)、消化器 0% (0/47 株)、その他 0.5% (1/203 株) であった。なお、妊婦の膣分泌物からは PRGBS を認めなかった。年齢の中央値は 83 歳であり、小児からは検出されなかった。

PRGBS は高齢者の呼吸器材料からの分離が多かったが、血液や尿からの分離も少数認めた。

GBS に占める PRGBS 分離率は入院患者 4.0% (17/425 株)、外来患者 2.8% (38/1,356 株) であり、入院患者のほうが高かった。

PRGBS の薬剤非感性率を下記に示す。なお、括弧内は既報の非感性率である。ABPC 0% (0%)、PIPC 100% (100%)、CTRX 29.1% (17%)、CFPM 25.5% (14%)、MEPM 0% (0%)、CAM 72.7% (92%)、CLDM 67.3% (89%)、LVFX 100% (100%)、VCM 0% (0%) であった。

なお、ペニシリン感受性 GBS の薬剤非感性率は ABPC 0%、PIPC 0.5%、CTRX 0.1%、CFPM 0%、MEPM 0%、CAM 37.1%、CLDM 20%、LVFX 31%、VCM 0% であった。

## 【考察】

抗菌薬適正使用の啓発が、不必要な抗菌薬処方の減少を促し、PRGBS の分離率低下に寄与したと示唆された。PRGBS の薬剤感受性は既報に比べ、セフェム系抗菌薬の非感性率が上昇し、マクロライド系抗菌薬の非感性率が低下した。またペニシリン感受性 GBS より PRGBS のほうがペニシリン以外の抗菌薬にも耐性を示す傾向にあった。当院では 10 年間で新生児の敗血症や髄膜炎由来株の PRGBS は確認されておらず、妊婦の膣由来の分離もなかった。一方、高齢者は PRGBS の保菌が散見されており、高齢者や基礎疾患を有する成人の侵襲性感染症にも留意すべきである。GBS 感染症を治療する際の抗菌薬適正使用のために、今後も薬剤感受性の推移を把握すべきと考える。

連絡先 0587-51-3333 内線 2329